

しによって真理の奥処 (arcano) そのもの
へと我々を案内してくれる導き手 (dux)
を持っているのですから。」

* * *

討論報告 (司会者)

加藤 信朗

De Beata Vita と共に、回信後の最初の著作である *Contra Academicos* は、カッシキアタム著作群の中だけではなく、アウグスティヌス (以下 A. と略記) の全著作の中で、もっとも難解な著作のひとつであろう。しかし、それだけに、A. の真理探究の起点にかかわるこの著作の読解は A. の全思索の理解のためにきわめて重要である。中川純男、岡部由紀子、神崎繁らの、我が国における A. 研究をになう中堅諸氏により、この著作をめぐる重ねられてきた研究の成果は大きく、それは世界各国の研究の水準に並び、今やその一角を突き破る勢いであることは欣快の至りである。

今回の片柳氏の報告もこれら諸氏の研究をふまえ、これに更に新たな視点を加えようとするものである。それはキケロの『アカデミカ』との対比検討を通じて、A. がアカデミア派と歩みを共にしているところ (自由な研究の態度、自己を不知者とする) と、袂を分かとうとしているところ (真理が見出され得ないことが *probabile* だとするアカデミア派—真理が見出されることが *probabile* だとする A.) という両面の微妙な分かれ目を、マニ教からの離脱と真理探究への潜心という A. の生涯における一断面に合わせて浮かび上がらせることに成功していると見える。ここで、片柳氏が、A. における真理探究の境位を、無知の薄明のうちにあつて知に向かう方向性をもつこととし、これを主として *probabile* という語に依拠して説明したのに対して、質問者神崎繁氏からは、探究の起点は *probabile* にではなく、むしろ、*credere* に置かれるべきではないかという論点が提出された。また、*verisimile* に原型—模像の二世界説を読み込み、*probabile* と *verisimile* を同義とするところから、*probabile* を認めることは原型そのものの知を何らか推定することになるということには A. の *veritatem quaerere* の起点はないとする論点も提出された。岡部由紀子氏からは、*sapiens* において *verum* が知られているということのうちには、不知者のうちにお

ける *veritatem quaerere* の起点は置かれていないこと、また、行為不能との反論に応じて主張された *probabile* が、*agere* の起点たる *sibi persuadere* において *verum* の代用とされることを A. は強く批判しているという論点が提出された。中川純男氏からは、探究の端緒に関係して、*scire me nescire* という言い方があるかが質され、それはないが、*scire ita videri mihi* はあるという答えが片柳氏によりなされた。水落健二氏よりこれに関連して、*scire ita mihi videri* というような重層的な自己認識に探究の端緒はあり、そこから、中期への展開も開かれ、*credere* の位置づけも与えられてゆくという視点が提出された。

信と知の交錯する探究の起点の委細はまだ薄明に包まれていて、*Contra Academicos* はいよいよ謎の書物になるように司会者には思われた。しかし、このようなことが主題とされたこと自体、本発表と討論の大きな成果であり、おそらく、初期から中期への展開のうちに *Contra Academicos* を読み直してゆくことが今後の課題として求められている。